

Title	シンポジウム報告：ポール・クロードル-日本：交叉する視線
Sub Title	Compte rendu Paul Claudel-Japon : regards croisés
Author	西野, 絢子(Nishino, Ayako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2018
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.115, (2018. 12) ,p.48 (101)- 51 (98)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01150001-0048

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム報告

ポール・クロードル—日本：交叉する視線

西野 絢子

2018年4月13日、慶應義塾大学・三田キャンパス、北館ホールにて、国際シンポジウム、「ポール・クロードル—日本：交叉する視線」(Paul Claudel – Japon : regards croisés) が行われた。ソルボンヌ大学、慶應義塾大学・フランス文学専攻、藝文学会の共催で、ディディエ・アレクサンドル教授（ソルボンヌ大学）、宮林寛教授（仏文専攻）、西野絢子（仏文専攻・准教授）によって企画された。

フランスの劇詩人・外交官のポール・クロードル（1868–1955）は大正期の日本に大使として滞在し（1921年から1927年）、日本を深く愛した。「詩人大使」クロードルにおける、相互的文化性について考えるこの国際シンポジウムは、開催前から日経新聞に「クロードルと日本の関わりを多面的に掘り下げたユニークな¹」企画として紹介され、当日は約100人の聴衆を集める大盛況であった。

「冬の黄昏にくっきりと浮かび上がる富士山」や日本美術、和歌、能、茶道を愛したクロードルは、独自のカトリック的視点から、日本文化に「様々な暗示の整然たる目録」を見ようとした。日本文化を抽象化し、そこに記号からなる、審美的で、精神に根差し、宗教と親和する文化をみたのだ。しかし、この見方を可能にする日本が存在する一方で、時代と歴史の混乱にさらされた日本もあり、クロードルが日本文化に注ぐ視線は複合的なものとなる。即ち劇作家・詩人・芸術家として、絵画、音楽、詩、舞台芸術を深く考える視線。カトリック教徒として、異国文化を改宗させようとする視線。そして外交官・フランス人として、事実を現実的に分析する視線。

これらのクロードルが日本に向ける複合的な視線と、逆に日本がクロードルに向ける視線を交差させる、というのがこのシンポジウムの試みである。クロード

ルの視点という一方向のみに焦点をあてたシンポジウムは過去に行われてきたが、今回は日本側の受容の視線を取り入れ、双方を立体的に検討する点が新しい。単なる比較を超えて、視線を「交差」させることにより、クローデルが構築する相互文化性の姿を明らかにするために、大学人・研究者だけでなく、演出家や能楽師も迎え、多様な視点から議論をしたことは画期的であった。

この趣旨は、冒頭のディディエ・アレクサンドル教授による発表、「クローデルが模範とした日本」によって明示された。同教授はクローデル研究の第一人者で、現代フランス文学の専門家であり、慶應義塾大学スーパーグローバル特別招聘教授として来日した。シンポジウムの要となる、詩人、信者、大使であるクローデルにおける「相互文化性」について、総合的な分析を提示した。即ち、1923年、大震災の恐ろしい体験を日本人と「共有」したクローデルは、日本文化の特異性を観察したのではなく、体験した。そのようなクローデルが考える相互文化性とは、距離、つまり異文化に対する「尊重」の念の中において定着すべきものであり、彼は伝統と近代性のバランスを前提とする判断を、1945年まで保ち続けた。

詩人大使クローデルの願った日仏の相互文化性の姿が提示された後、午前の部ではまず、「劇詩人」としてのクローデルの視点とその日本での反響に焦点が当てられた。「多文化が行き交うクローデル劇」と題し、クローデル及び演劇の専門家、パスカル・アレクサンドル＝ベルグ教授（マルヌ＝ラ＝ヴァレ大学）は、19世紀末のヨーロッパにおける新しい演劇形態の模索という広範な動きの中に、クローデルによる能楽の発見を位置づけた。続いて西野絢子が、「クローデルと能：日仏往復」の中で、クローデルによる能の解釈と翻案について考察した後、彼が能や日本文化に想を得て創作した作品を、今度は日本人が「新作能」につくりかえる、という独特の受容形態を紹介し、作品を分析した。クローデルを介した能は、日仏の往復を繰り返し、交流に貢献しつづけているのだ。

午後の部・前半の中心となったのは「詩人」としてのクローデルの視点であった。比較文学の専門家、黄蓓・復旦大学教授が、『百扇帖』における空白の詩学について分析した。この詩集は、クローデルが俳句風の短詩、約172編を、屏風のように開く帳面に、毛筆で書き記した芸術的オブジェでもある。分析は三段階に分けて示され、即ち、短さ（響きあう場としての空白）、間隙（関係が結び合う空間としての空白）、余白（内なる水としての空白）である。このクロー

デル独特の「扇」についての考察は、「ポール・クローデルに捧げるもう一つの扇：ベルギー・フランス語圏におけるジャポニスムの一側面」という次の発表と呼応した。マラルメ研究の第一人者であり、ベルギー・フランス語圏文学の専門家、宮林寛教授（慶應大学）は、マックス・エルスカンプの『日本の扇』（1886年）という貴重書を紹介し、このシンポジウムの趣旨に、フランスに留まらない方向から光を注ぎ、幅ひろい視点を齎した。二つの発表とも、日本とフランス・フランス語圏の文化が融合する、珍しい芸術作品の実例を、スライドを通して聴衆に、視覚的・具体的に提示する貴重な機会であった。

午前・午後とも聴衆は熱心に講演を受け止め、野心的な質疑応答が飛び交った。日仏両言語を使用するシンポジウムのため、翻訳資料を配布したことも、参加と理解の助けとなったのかもしれない。

午後の部・後半は、熱心な聴衆に、視覚・聴覚両面での喜びを提供した。演出家の渡邊守章・東京大学名誉教授が、クローデルの代表作、『縋子の靴』の日本初演について、「翻訳・演出家による実践的考察」を語り、演劇創作現場における貴重な体験を明かしたのである。クローデルの超大作を翻訳した上に、フランスでも過去に二例しかない「全曲版」の上演を日本語で実現させるという偉業を成し遂げた渡邊氏によるこの講演は、事前から期待を集めており、会場はほぼ満員となっていた。講演に続き、2016年12月に京都で初演された²、この地球規模の大演劇の様子をダイジェスト版で収録した映像が披露された。「世界文学」の詩人・クローデルの傑作『縋子の靴 あるいは最悪必ずしも定かならず—四日間のスペイン芝居』は、世界的な演出家である渡邊氏により、クローデルに縁の深い日本の舞台に開花したのである。まさに日仏の相互的文化性の成果であるこの美しいスペクタクルは、聴衆全てを魅了した。

このような感動のあと、シンポジウムの最後には、「能をめぐるラウンドテーブル」という、また別の独特なステージが準備されていた。喜多流シテ方能楽師・狩野了一氏と、能楽研究所元所長、西野春雄・法政大学名誉教授を招き、ディディエ・アレクサンドル教授が、「クローデルと新作能『ジャンヌ・ダルク』」について質問しながら鼎談が行われた。新作能『ジャンヌ・ダルク』は、クローデルが能に想を得て創作したオラトリオ『火刑台上のジャンヌ・ダルク』（1934年）からヒントを得て創作された新作能で、2012年にフランスで上演された。この能作者である西野氏に、アレクサンドル教授が、異文化間における文学・演

劇の創作について問いかけると、能の普遍性が、クローデル演劇の普遍性と呼応することが明らかに語られた。ジャンヌ・ダルクの役を演じた狩野氏には、新作能の上演について、実践的な質問が投げかけられた。狩野氏は、舞台上写真やこの新作能のために特別に作られたジャンヌの能面の実物を披露しながら、新作能及び、通常のレパートリーにある伝統的な能を演じる方法について、具体的に説明した。能舞台にたつ側からの、かなり貴重な視点が明らかにされ、このシンポジウムの趣旨が掘り下げられた。

さらに、このラウンドテーブルの最後に、狩野氏により新作能『ジャンヌ・ダルク』の詞章の一部が披露された。ちょうどクローデルの『火刑台上のジャンヌ・ダルク』を引用して綴られた部分であった。「火は燃えてこそ美しい」。能楽師の発する声は、会場に時空を超えた風景を想起させる、不思議な、筆舌に尽くしがたい感動を呼び起こした。大正期にクローデルを魅了した能。その生きた舞台に接することが、どのような感動を与えるかを想像させるような、心に響く声であった。クローデルとその相互的文化性について考察するシンポジウムの最後を締めくくるのに適切な響きであり、クローデルと日本に関心を持ち、集った参加者・登壇者全ての心をつなげる瞬間であった。

注

- 1 日本経済新聞、2018年4月10日、朝刊、「文化往来」。
- 2 劇評「渡邊守章演出『緋子の靴』—21世紀の記念碑的全体演劇—」（西野純子）、日仏演劇協会会報、復刊7号、2017年、日仏演劇協会、p.18-20参照。